

♪ 2021年度 **poco a poco** ♪

Nr. 4 2021年5月10日(月) 文責:プファイル・辰巳

## Muttertag ~ 母の日

5月9日(第2日曜日)は「母の日」でした。アメリカ合衆国で始まったことだそうですね。1907年5月、ウェストヴァージニア州のラフトンという町で、ジャーヴィスという女性が、亡くなったお母さんを偲ぶ会を開きました。翌年も5月の第2日曜日に、彼女は自分のお母さんを偲ぶとともに、礼拝に集うすべてのお母さん方に、記念としてカーネーションを贈りました。この習慣が、いつしか「母の日」として広まったのだそうです。

日本でも母の日にカーネーションをプレゼントしますね。「～」～ 母さん お肩をたたきましょう タントン タントン……」などと歌いながら、私も昔、母の肩たたきをした記憶がよみがえります。

ドイツにも第2次世界大戦以前に、この習慣が伝わりました。旧東西ドイツで、その広まり方は異なったようですが、現在では5月の第2日曜日は、Muttertagとしてカレンダーにも記載されていますね。昨日はお天気にも恵まれた日曜日でした。お祖母ちゃんやお母さん方とお散歩を楽しむご家族の姿が多く見られましたね。

## 音楽こぼれ話 <楽譜出版のお話 ②>

### 楽譜の印刷術:惜しまれる職人技>

フランクフルトから西へ約40km、ライン河のほとりにマインツという町があります。ヘッセン州ではなく、ラインラント・プファルツ州の州都です。大司教様もおられる大聖堂やシャガールのステンドグラスで有名な教会などがあります。前回のお話で登場した活版印刷術のヨハネス・グーテンベルグの町でもあり、グーテンベルグ博物館も有名ですね。



そのマインツの町に、楽譜出版の老舗の一つ、ショット社という出版会社があります。ショット社については、いずれ詳しく紹介するつもりですが、今回は、以前そのショット社を見学させていただいた時のことを少しお話します。もうかれこれ30年も前のこととなります。デジタル化は未だそんなに進んでいなかった時代です。



昔の活版印刷が、文字を一つ一つ拾いながら(植字)文章を作り上げていたように、楽譜印刷でも、5線にくっついた音符を一つ一つ拾い上げて旋律を作り上げていました。簡単な歌の楽譜だけではありません、両手で弾くピアノの楽譜やオーケストラのスコアなどを印刷することを考えると、気の遠くなるような作業です。

植字作業にコツコツと取り組む職人さんたちの姿を見学しながら進んでいくと、最終段階に近い作業場で、あっと驚く職人技を目にしました。タイとかスラーという記号をご存知でしょうか。タイは同じ高さの音同士を結ぶ曲線、スラーは違う高さの音をなめらかに演奏したいときに結ぶ曲線です。この曲線を、その時代、鉄筆で手描きしておられたのです。長さや幅が毎回異なる曲線は、手描きに頼るしかなかった時代。それはそれは、美しい曲線を一気に描き上げる手元を見ながら、「プロの手腕」とはこのことだ、と感心したものです。

第2の驚きは、楽譜の最終チェックをする方々の仕事ぶりでした。ピアニストやオーケストラの録音演奏の音をヘッドフォンで聴きながら、音符と見比べて、印刷された楽譜に間違いがないかを探していくのです。「この人たちの耳(聴覚)は、どうなっているのだ?」と、思ってしまいました。指揮者も顔負けの正確な耳を持った人にしかできない、やはり職人技としかいえない働きぶりです。

現在は楽譜作成ソフトが開発され、つなぎたい音同士をクリックすると、どんな長さのタイやスラーも、あつという間に描いてくれます。音符の長さを間違えたり、臨時記号をつけ忘れてしまっても、PCが教えてくれます。またスコアから各パート譜に描き換えるのも、クリック一つでできる機能もあります。本当に便利になったものです。

コピー機やPCがなかったころの楽譜作成や写譜のことを考えると、昔は大変だったろうなと思います。その反面、便利になっていく中で失われた職人技もたくさんあったらうなとも思います。どんなに便利な世の中になっても、こつこつと練習を積み上げて演奏技術を磨くことや、一つ一つの音符を愛おしく思う気持ちは失いたくないと思う今日この頃です。